

■ 公開講演会

ジェンダーと暴力：宅間被告の公判から



2003年5月12日(月)
午後1時～2時30分
南山大学D棟

森田 ゆり
(エンパワメント・センター主宰)

司会：

本日は、エンパワメント・センター主宰の森田ゆりさんを迎えての講演会でございます。講師の紹介をあまり丁寧にやると時間がありませんので省略させていただきます。森田さんは全国あるいは世界をフィールドとして実践活動をしている方でいらっしゃいます。従いまして、本日は、そのような体験に裏打ちされたお話が聞けるだろうと楽しみにしております。では、さっそくお話に入らせていただきますので、ご静聴のほどお願いいたします。

マスメディアの犯罪性

森田：

みなさん、こんにちは。

これから1時間半、あまり時間がないですけれども、暴力ということについてみなさんと一緒に考えていきたいと思っています。

レジュメを用意しましたので見てください。「ジェンダーと暴力」というテーマをつけました。

私は、いったいどういうバックグラウンドを持って、この暴力のことを話すのか。そのことを簡単にお話しして、それから本題に入りたいと思います。

私はアメリカに二十数年間住んでいまして、最初の約10年間は、子どもの虐待や女性に対する様々な性暴力、ドメスティックバイオレンス、そういった問題の被害者支援と防止教育活動をする人たちを養成研修するのが仕事でした。その後7年間、カリフォルニア大学で、今度は女性と子どもだけではなくて全ての人に対する人権侵害に、どう対応していくのかということをお話します。

ちに教えるカリキュラムの開発、研修の仕方、参加型で教えていくやり方だとかを研究し実践していました。日本に来てからも同じように、実際に子どもの虐待やドメスティックバイオレンスやセクシュアルハラスメントや人権の問題に携わって仕事をしている人たちへの研修をやっていきます。

同時に、アメリカに居た頃から現在まで、いろいろな暴力被害を受けた人たちのグループセラピー、グループカウンセリング、そのプログラムの開発ということに携わってきました。今日の話の背景にはそういう仕事があると理解してください。

宅間被告という名前が書いてあるので、どんな話をするのだろうと思って来られた方もいるかと思います。私はここ1年半にわたって、公判を傍聴しています。なぜそんなに関心を持っているのかということなのです。

あの事件が起きたとき、マスメディアはどんなふうに報道したか少し思い出してください。新聞やテレビに、精神障害者と暴力、精神障害者と犯罪というタイトルがたくさん載りました。宅間が精神病院を出入りしていたということもあって、あの人は精神障害者なのだと思われ、そのことでメディアは精神障害者=犯罪、この二つのことをつなげた報道を約半年間にわたってしていました。

メディアは、たいへんに恐ろしい力をもっていると思いました。あれは、とても犯罪的なことでした。精神障害者の人たちは暴力を特別に犯しやすい人たちではありません。犯罪を犯しやすい人たちでもありません。そうであるにも拘わらず、そう報道されたことによって、実にたくさんの精神障害を持っている人たちが、大変に苦しい状況に追いやられ、なかには、命を自ら絶った人たちもいるのです。それは精神障害者だけではなくて、家族の人たちにとっても、あたかも犯罪を犯すのは精神障害者であるかのような、報道がされていた。

新聞というのは、よく読むと不正確なことは書いてないのです。しかし、見出しが人にどういう印象を与えるか。さらに、見出ししか読まない人もたくさんいます。みなさんだって忙しいときなんか、見出ししか読まないでしょう。見出しに精神障害者と犯罪が関連するようなことを書いていると、私たちの意識の中に、精神障害者って、なんか危ない人たちなのかなという、そういう意識が植え込まれていきます。同じようなことありますよね。外国人と犯罪というかたちで報道されていくと、外国人って、犯罪を犯しやすい人なのだと、少しまともに考えればそんなはずないと思うことを、脳の中にインプットされていってしまいます。これはコマーシャルが私たちの脳にどのようなインプットをするかというのとまったく同じことです。

宅間被告は、精神障害者ではありません。そのことは、今はもちろんはっきりわかっていることですけれども、あの事件が起きて間もなくわかったことです。にもかかわらず、そのことばかりが取りざたされたために、精神障害者を「たいへんに恐ろしい人たちなのだ」と見る偏見が広がりました。

私は、改めてメディアの人たちには、そのことをもう一度きちんと反省を込めて、どういった影響を与えてしまったのかということ考えて欲しいと思います。

暴力を犯しやすい人のプロフィール

それでは、暴力を犯す人、犯罪者、暴力を伴う犯罪者のプロフィールからどんなことが言えるのでしょうか。どういう人が暴力を犯しやすいのか。これがあまり特定できないのです。暴力にもいろいろなタイプの暴力があります。とりわけ私が日々関わっている家庭内における暴力、ドメスティックバイオレンスや子どもの虐待、あるいはセクシュアルハラスメント、そういった暴力というのは、いったいどういう人が振るうのか、ほとんどプロフィールを見いだしていくことができません。すなわち、あらゆる人が対象なのです。

ただ一つだけあります。それは男性だということです。女性より男性のほうが圧倒的に暴力を振るう。犯罪を犯す。これはまるで当たり前のことのように私たちみんなが受け入れていると思います。

犯罪学という学問があります。でもその犯罪学の中でも、なぜ男性のほうが暴力を振るいやすいのだろうかという研究は、あまりされていないです。アメリカには、そのことを追及している研究者はいますけれども、数は少ないです。私は、もっともっとこの問題が追及されていいのではないかと思います。

ある大学で、この教室の2倍ぐらいの学生さんたちがいたのですけれども、そこで私は、「みなさん、なんで男性のほうが暴力を振るいやすいのか、いろいろな理由が考えられると思うのですけれども、もし二つだけ理由を挙げてと言われたら、あなたはへと答えますか？ 紙に書いて、あとで私のほうに出してください」とお願いしたことがあります。いろいろな理由が挙がってきて大変興味深かったです。

統計を見れば明らかのように、例えば日本の統計ですと、2000年の法務省の統計では、犯罪、暴力犯罪者の95%は男性です。青少年、ティーンエイジャーの暴力では、女子の犯罪率が増えています。それでも女子は全体の2割。ティーンエイジャーの犯罪率の中の暴力犯罪でもだいたい80%は男子だということです。

私は、暴力をこの社会から無くしていきたいと思う一人として、ジェンダーというのは暴力のいろいろな要因の一つとして、もっともっと注目して良いことではないかと考えているのです。

実は私は、アメリカにいたときから、「ジェンダーと暴力」をライフワークにしてきた人間です。そういう者にとって、あの事件は、一つの大きな課題を与えられてしまった、と思いました。事件が起きた直後は、非常に限られた報道しかなかったわけで、精神障害ということばかりが新聞には書かれていたの

ですが、私はそのときジェンダー社会は、宅間被告が人生の中で繰り返してきた様々な暴力に、どう影響を与えたのだろうか、そのことが、私が学ばなければいけないテーマであると直感しました。私をしてそう考えさせる二つのことがありました。一つは、覚えておられると思いますけれども、あそこで8人の子どもたちが殺されたわけです。その8人の子どものうち、7人までは女の子だったのです。もう一つは、あの事件を起こした直接のきっかけを、宅間被告は3番目の妻を殺したかった、しかし殺せない、成功率が低いという状況の中で、ほかの方法を考えた。

宅間被告という人は、ドメスティックバイオレンスの加害者です。4人の妻がいました。そのことごとくに対して、暴力を振るい続けてきた人です。特に3番目の妻に対しては、離婚が成立したあとも、いかにして殺すかということを考えていました。しかし、仕事場の住所が突き止められない。興信所を使ったり、たいへんなお金を使いますがそれでも見つからない。そういう中で、それではほかの方法で打撃を与えてやろうと考えたのがこの事件だったわけです。

前日に、彼はいろいろなほかの方法を考えています。ほとんどが女性を対象にした大量殺人です。例えば、空港に行って、彼の言葉でいうと、「ベっぴんさんのスチュワーデスをつぎつぎと撃つ」、あるいは高校に行って、女学生たちを屋上に追いやって、そこで大量に殺す、そういうようなことを考えていたのです。

私は、そういう関心を持ち、ある意味では仮説をたてた上で、あの事件の公判に行くようになりました。ただ、宅間被告が最初に自分で自分のことをしゃべったその公判は6時間にわたったのですけれども、聞いていて非常にがっかりしました。私が訊いて欲しいことは、ちっとも訊いてくれないのです。それで私は、弁護士と検事に手紙を書きました。先ほど私がみなさんに言ったような理由を書いて、私がどういう人間なのかということも書いて、こういう質問をしてくださいとお願いしました。そうしたら1週間後の公判で弁護士が私の質問をしてくれたのです。

第1の質問というのは、「意図して、女子ばかり狙ったのか？」という質問でした。それに対して宅間被告は、「意図したかどうかはわからないが、たぶんそうだっただろう」というようなことを言いました。さらに、「どうせあいつらもしょもない女になるのだから、こんちきしょうという感じだった」という応答をしました。

その次の質問も続けてしました。それは前回の公判で、彼は余すことなく女性蔑視のコメントをたくさんしました。例えば、「いままでつきあってきた、あるいは結婚してきた、そういう女性たち全てが性的な対象でしかなかった。自分の世話をしてくれる人、食事を作ってくれる人、そういうふうにしかな、どうしても考えられない」というような発言を、非常に汚い言葉でたくさん言っ

てきました。ですから、それを受けて、「そういう女性蔑視の考え方ってというのは、誰から学んだと思いますか？」ということ、私は知りたかったのです。彼はその質問に対しては、答えませんでした。

答えなかったのが、弁護士は、「あなたは母親に対して、どのような気持ちもっていますか？」という質問に切り替えました。そして、彼は母親について話します。「母親は白痴だ」とか、「何もできない女だ」とか、「産んでも子どもを育てるノウハウも知らない女だ」とか、そういう言い方で表現しました。そして、さらに、「父親からつねに暴力を振るわれていた」。彼も、やはりドメスティックバイオレンスの家庭に育った人です。母がいつも殴られていた。それに対して、母親のほうは、「もういい、もういい」と言って部屋の片隅のほうに逃げて行く。そういうことをずっと見ながら育った人間でした。

公判は今ほぼ終わりつつあるところです。今、22回目の公判が終わりまして、彼が話す場面はすべて終わりました。おそらく来月、あと1回か2回あって、夏頃には求刑が出ることとなります。どういう刑になるかというのは、ほとんどわかっていると思います。

ジェンダーの意味

ジェンターという言葉は先ほどから使っていますが、ジェンダーとはいったいなんだろうとっておられる方もいると思います。

身体的生理的な性差ではなくて、社会的文化的な性差のことをジェンダーという、という言い方がよくされます。しかし、なんだか今一つピンとこない説明だと思います。そこで、もう少しわかりやすく考えたいと思います。

今言っているジェンダーという言葉は、英語で、性とか性別という意味を持ちます。そしてもう一つ、性別という意味の英語があるのです。それは、セックスという言葉です。ですから、性とか性別と言ったら、英語では、セックスとジェンダーという二つの英語があるわけです。セックスは、身体的生理的な性別です。ジェンダーのほうは、文化的社会的な性別。しかし、今一つピンとこないの、辞書で調べてみたのです。辞書で男という言葉と女という言葉を引きしてみました。そしたらこう書いてありました。

四つぐらいの辞書を見ました。三省堂の新明解国語辞典。みなさんも持っているかもしれませんね。金田一京助さん編集です。2002年3月版です。女という言葉はこのように書いてありました。

「①人間のうち、雌としての性器官性機能をもつほう」と。これはセックスのほうです。

「②一人前に成熟した女性で、やさしい心や優柔不断や決断力の乏しさがあ、そのいっぽう、強い粘りと包容力をもつ人をいう」と。これは何？これがジェンダーです。この②のほうがジェンダーとしての女性ということです。

新明解国語事典では、女性とは、このような存在であると定義をしているのです。

では、新明解国語事典には男性、男は、どのように書かれているのでしょうか。

「①人間のうち、雄としての性器官性機能をもつ」。これはセックスです。もう一つ、

「②一人前に成熟した男性で、弱い者をかばう、積極的な行動性をもった人をさす」。これが男性というものだというふうに、辞書は定義しています。

ジェンダーとはこういうことです。男とはこういうものである、女とはこういうものであると辞書で定義されているということです。しかし、今のは新明解国語辞典ですから、別の辞書も見つけないかかもしれません。岩波書店の広辞苑を見ました。広辞苑にはなんて書いてあるのでしょうか。女、

「① 人間の性別の一つで、子を産みうる器官をそなえているほう」と。これはセックスです、生理的な性別です。

「② 成年女子」と書いてあるだけなのです。だから、③にいきます。

「③ 天性やさしいとか感情が豊かだとかいう通用性に着目している場合の、女性」と。それが、広辞苑の説明するジェンダーです。では、男のほうはどうなのでしょう。

「① 人間の性別の一つで、女でないほう」。(会場・笑い) これはセックスです。これ、ひどいと思いませんか？ あの格式高き広辞苑が、男とは、人間の性別の一つで、女でないほうと定義するというのは、あまりにも貧しいという気がします。性別というのは、男と女だけではなく、その間の人たちもいるわけです。もちろん少数派ですけども。そういうことは、広辞苑を書いている人たちも知っていると思うのですけれども。ちなみに、今私が読んでいるのは、広辞苑の1999年版です。10年前20年前のものではないです。そこで、①が、その人間の性別の一つで、女でないほうということ。

②は、やはり「成年男子」と書いてあるだけで意味がない。

「③ 強くしっかりしているなど、男性の特質を備えた男子」と書かれています。(会場・笑い) これがまさにジェンダーということです。

辞書に堂々とかう定義されていることが書いてあることは、私たちの社会がジェンダー社会だということを、見事に物語っていると思います。女性は、「天性やさしくて豊かで弱い」、そういう存在であるだけなのだろうか？ 「強くしっかりしていて、弱い者をかばう」と。それは男性の特質なのだろうか？

私は、男と女は同じであるとは思いません。いろいろな違う側面をもっていて、当然、身体的な生理的なレベルでは大きな違いがあり、その生理的なレベルのものの中に、ホルモンの違いということがある。ホルモンの違いがもたらす行動様式の違いということもあると思います。ただ、辞書が定義するように、女とはこういうものである、男とはこういうものであるというふうに決めない

でほしいということです。私たちは、みんな、自分の人生を、たった一度しか生きられないのです。一度しか生きられない人生だったら、女らしく男らしくと誰かが決めたように生きるのではなく、自分が納得するように生きたい。

辞書にこう書いてあるから、それをみんなが信じているから、男だから強くなければならないという、その脅迫観念のようなもので生きていくのはいやでしょう？ 誰も自分の人生を生きてくれない、私が生きていくしかないのです。私が私として人生を生きている。それを見てください。これが私なのです。これが丸ごとの私です。それを受け止めてください。そういう生き方をしていきたいというのは、おそらく、全ての人、根源的なニーズだと思います。

そうであるにも関わらず、私たちの社会の中にたいへんに強く根をはっている、男は強くあるべきだ、女は天性やさしく、感情豊かで、そして決断力は乏しくて、そう生きるべきだという、その重圧を払いのけて生きていきたいと、それがジェンダーをしっかりと考えていきましょうという動きです。

恐ろしい事件を起こした宅間被告、彼は人生を通して、たくさんの暴力を振るってきた人です。とりわけたくさんの女性に、多くの被害を与えてきた人です。その人が、強烈に、そして、全てを手放しても、最後まで、決して手放そうとしないもの、それが男らしさということでした。

先月、最後の彼の供述を聞きに行って、ここまで見事に男らしさにこだわり続けた人、そして、拘り続けたがゆえに起きた非常に不幸な出来事だったと、強く感じさせられました。そこで、どのように男らしさということは彼の中にあり、どのようにしてそれは暴力という表われ方をしたのか、これは宅間被告だけではなくて、多くの人にも関連してくることなので、そのことを少しお話ししたいと思っています。

DVの加害者

宅間被告のような、ドメスティックバイオレンスの加害者あるいは被害者の相談や話しを、私はたくさん聞いています。米国の研究分野ではドメスティックバイオレンスの加害者が、どういうプロファイルをもっている人たちなのか、どういう傾向をもっている人たちなのか、ある程度明らかにされています。その一番はっきりしていることは、先ほども言ったように、圧倒的多くが男性だということです。実は、女性から男性へのドメスティックバイオレンスというのにも確実にあります。私も日本で、そういう人の相談を受けたことがあります。アメリカでは、同性どうしのカップルの中でのドメスティックバイオレンスもまた問題としてとりあげられています。ただ、アメリカでも日本でもどこの国でも、やはり圧倒的に多いのが、男性から女性への暴力、夫から妻への暴力です。日本では、一昨年は116人の日本の妻たちが、夫の暴力によって殺されました。その前年は136人です。だいたい100人を少し超えています。そして

今、ご存知のように、略称ドメスティックバイオレンス防止法が成立しました。かつては殺人というかたちでしか表に出なかったDVがらみの事件が、法律が施行されたことによって、すこし変化してきています。すなわち、殺人件数だけではなくて、暴行、暴力の件数がジャンプしているという、そういう統計的な変化をもたらしています。

日本の社会でも、この問題は蔓延しているのです。内閣府がした調査によりますと、20人に1人の女性が、夫から殺されるのではないかと思うような暴力を受けているという数値があがっています。かなりの数です。宅間被告は、ドメスティックバイオレンスの典型的な加害者ではないです。ああいう人は、たいへん特殊です。

ドメスティックバイオレンスの加害者の圧倒的多くの人たちは、自分の恋人や妻以外に暴力を振るったことのない人です。ふつうの仕事を持って、毎日仕事に出かけて行っています。多くの人たちは、たいへん外面がいいです。ですから、宅間被告のように誰に対してでも暴力を振るってきた、誰からも嫌われている、そういった人はドメスティックバイオレンスの加害者としては、例外的な存在と考えていいと思います。それでも、ジェンダーと暴力については、たいへん多くのことを学ばせてくれると思うので、私は宅間被告のあとを追っているわけです。例えば、彼が暴力を振るう「時」です、どういう時に暴力を振るうかと言いますと、彼の言葉ではこういう言い方をしています。これはついこの間の公判でのことですが、「むかしから、生きてるのがやっと、しんどかった。100人中95人までは、こういう俺の気持ちはわかってもらえないだろう。むしゃくしゃする不愉快な思いを、車のタイヤをパンクさせたり、ガラスを割ったり、こしゃなことをやって鬱憤ばらしをして生きてきた。」『こしゃっ』というのなんか細かいという意味らしいです。この供述というのは、繰り返し繰り返し、いままでなんども彼が言ってきたことです。その鬱憤ばらしに、この人が最も頻繁にした攻撃行動というのが、強姦と痴漢行為です。中学のときからそういう行為を始めています。道端で、あるいはテレクラで、あるいは妻たちに対して、あるいは少しどこかで知り合った人に対して、性的な暴力をつねに振るうことで、彼の中のむしゃくしゃした思いを振り払おうとしてきたということなのです。

怒りの仮面

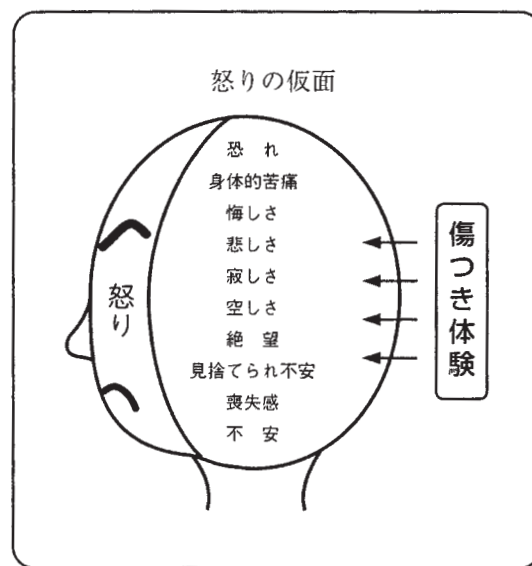
人が恐ろしい攻撃行動を振るうときは、怖い顔しています。ドメスティックバイオレンスの加害者が、あるいはティーンエイジャーが、キレて攻撃行動に出る、暴力行為を振っている、そういうとき、その人は怖い顔しています。ですから、周りから見ていると、この人はとても怒っていると感じます。実は、この怒りという感情は、二次的な感情とも言われています。すなわち、怒りに

なるには、その前に一次的な感情がいろいろあって、それがつもりつもって怒りに変わっていくといいます。

ですから、すごく怒っている怒り、もしあなたがそれを周りにいる人として見たときに、まずしていただきたいことは、その今怒っている顔は仮面にすぎないですから、仮面を少しずらしてみたいのです。そのマスクを少しずらしたら、その裏側に、どんな感情がひしめいているのか、と考えて欲しいのです。

70年代の後半からアメリカでは、ドメスティックバイオレンスの加害行為をする人たちを、どうしたら更正させることができるだろうという研究を進めていて、初期は、怒りのマネジメントばかりをやっていたのです。怒りをどうコントロールするのか、行動療法なんかを用いて、どうやって怒りをマネージするかということをしきりに教えていました。そのうちに、それがあまり効果をもたらさないということもわかってきたのです。怒りをマネージすることはもちろんある程度必要なのですけれども、本当に効果をもたらすためには、怒りというマスクの裏側の感情を、本人が見ていかなければならない。

図 怒りの仮面



「癒しのエンパワメント」森田ゆり 著／築地書館

では、裏側にはどんな感情があるのかということです。いろいろな感情です。でも、共通するのです。例えば、悲しいとか、寂しいとか、悔しいとか。それから、自分への自信のなさとか、それと同じようなことですけど、無力感であるとか、あるいは不安です。あるいは恐怖です。あるいは見捨てられてしまうのではないかと不安。あるいは喪失感とかです。これはどれも不快な感情です。快な感情ではないのです。感情には、快な感情と不快な感情があります。幸せ、嬉しい、ハッピーというのは快な感情です。感情には、良い悪いというのはないので、いい感情、いけない感情、正しい感情はないです。ただ、

快、不快というのはあると思います。ここにあるのはみんな不快な感情です。感じていたくない、そういう感情です。そういう感情が起きてきたら、どこかに放り出してしまいたい。ぎゅうっと押し込めてしまいたいです。

こういう感情はどこからくるのでしょうか。傷つき体験です。いじめとか、虐待されるとか、ネグレクトを受ける、暴力を受ける、誰かから裏切られるとか、そういった様々な経験によって、人はたいへんに深く傷つきます。暴力を受けたら、人は恐怖や不安に陥ります。人間不信に陥ります。親から「おまえなんかほんとは欲しくなかった。おまえなんかろくでもないやつだ」と言われ続けると、人は、自分に対して自信をもつことができなくなります。自分はなんてつまらない人間なのだろう、生きていたってしょうがない、という思いになります。そういう感情です。これは抑圧しても、どこかで出てきてしまう。

例えば、宅間被告のように、小さなときから父親から体罰を受けてきた。父親が母親を殴り、母親が無力に陥っている状態を目にしてきた。それはたいへんな傷つき体験です。もちろん、だからといって私は、彼が自分のやったことに責任をとらなくてもいいとか、そんなことはまったく思っていないのですけれども、ただ事実として、彼はそういう傷つき体験をたくさんしてきた人です。そして、それに伴う様々な感情を抱えていました。こういう感情というのは語られなければならない。誰かに対して語って、そして、受け止めてもらわなければならないのです。

きっと私たち一人一人、いろいろな程度の差はあれ、傷つけられる、不信感をもつ、誰かから裏切られる、あるいは自分に自信がもてなくなってしまった、そういったことを体験してきたと思います。そういうときのいろいろな感情を、周りの誰かに語ることでできる人がいたでしょうか。いたとしたら誰でしょう。周りにそういう気持ちを語ることができて、それをしっかりと受け止めてくれる人が自分にはいたという人は、たいへんにラッキーな人です。今もしこの中で、私が手を上げてくださいと言ったら、そんなに多くの数は上がらないはずですが。それほど私たちの社会は、人の、こういう感情に、耳を傾けるということをしていない社会です。そして社会は、こういう感情は、人には語ってはいけないと教えてきました。とりわけ男子は、こういうヤワな感情は人に言わないのが男らしいと教えられてきました。「こういうこと、ぼくは悲しい。ぼく、寂しいの」、「ぼくは、自信がないんだ」ということをグジュグジュ言っていると、周りからその男子はなんて言われるのですか？ 女々しいとか、もっと酷い言葉があります。女の腐ったのという言い方があるのです。しかし、そういう感情は、持ってしまうのだから仕方がないでしょう。もたらすような出来事が起きてしまったのだから、持って当然です。もちろん、女子に対しても、そんなに簡単にこれを誰かに言って受け止めてもらう人がたくさんいるわけではないです。ただ、先ほど言ったような、男の子たち女の子たちに押し付けられるジェンダーの違いは大きいと思います。男子は、そして男性たちは、こういう感情をぐち

ることを社会から許されないで来ました。しかし、広辞苑や新明解国語事典が
いうようなジェンダー社会が男子に対して許している感情表現があります。そ
れが怒りの感情です。

ジェンダーの違いを強調する社会、女は優しくそして粘り強くということが
求められる社会では、女性が怒るということは受け入れられないです。女性が
本気で怒ると、すごく嫌われます。ここにいる女性たちも、年齢のいつている
人たちだったら、そういう経験が一度や二度あると思います。なんて嫌なばば
あだとか、いろいろな言い方をされます。女性が怒ることは、なかなか社会か
ら受け入れられないのです。しかし男性は、やはり一家の柱として、組織の代
表として、怒らなければならない時はしっかり怒るんだ、というかたちで社会
から怒りが、認められている。

自分の中にある悲しみとか、寂しさとか、悔しさとか、こういう感情が刺激
されると、その感情をどうしていいかわからなくなってしまうのです。ドメス
ティックバイオレンスの加害者の人たちも、日常的に一緒に生活している自分
より力の弱い人、子どもであるとか、妻であるとか、そういう人たちと生活し
ているときに、なんでもないことなのだけれども、自分の中でずっと抑圧して
きている、この感情のどこかが刺激されるのです。例えば妻が「あんたって、
いったいつになったら課長になるの」と言ったとすると、自分の中に一杯抑
えている敗北感だとか、自信のなさだとか、それらはみんな傷つけられてきた
ことゆえに起きたことですが、刺激されると爆発するわけです。爆発したとき
に、本当は刺激した人に対して、「ぼくは、自分に自信がないのだ。どうした
らいいのだろう」と、率直に語る事ができればいいです。しかし私たちの社
会では気持を率直に語るということを奨励されてきませんでした。言葉にする
スキルもない。そうすると、爆発したときに、ぱっと怒りの仮面をかぶる。そ
れが攻撃行動として出ていきます。

実は、圧倒的多くの人たちは自分を攻撃します。実際に自分を傷つける人も
いるでしょう。また、アルコール依存、薬物依存も自分を傷つける行為。自殺
をしてしまう人もいます。しかし、自分を傷つけると同時に、他者を傷
つける人たちもいるわけです。この他者を傷つけるというこの怒りの感情は、
特に、相手を力で支配したい、相手をコントロールしたいという欲求が加わっ
たとき、それは暴力というかたちになっていきます。

攻撃性をなくしていくために注目して欲しいことは、そういう攻撃行動の背
後にある、このようないろいろな感情です。

エンパワメントの意味

レジュメの後半に、エンパワメントとか、人権とかということが書いてありま
す。エンパワメントということ、私はいつもこういうふうに、ハートを書い

て話します。今まで話したことと、このハートのエンパワメントとが繋がっていきますので、どう繋がるのか、少し見ていてくださいね。

レジュメを見てください。「エンパワメントという関わり方」と書いています。その横に、ハートの絵が書いてあります。エンパワメントという関わり方というところに、「人は生まれながらに様々なパワーをもつ存在だ」と書きました。エンパワメントという言葉が、力をつけることと訳されていることがときどきあるのですが、この言葉はそういう意味ではありません。力をつけるということではなく、むしろ、人というのは生まれながらにして、たくさんのいろいろな力をもって生まれてくる。そういう考え方を前提にしています。生まれながらにしてですから、あかちゃんを想像してみればいいわけです。この生まれたばかりのあかちゃん。手の上に乗せてぽんと落としたり、死んでしまうかもしれない。非常にか弱い存在です。

しかし、このあかちゃんの中には、たくさんのいろいろな力が詰まっていると考えるのが、エンパワメントという考え方の出発点です。

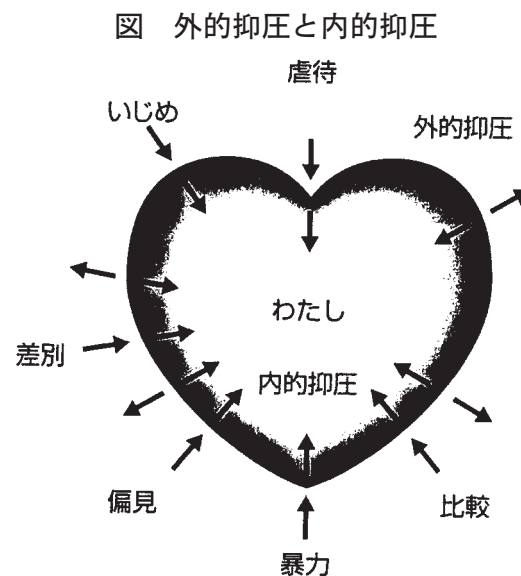
これは、観念ではなく非常に実践的な考え方です。どのような人間関係においても、エンパワメントという関わり方というのは、その考え方を知っていることによって、実践的に使っていくことができます。生き方などという抽象的なことではないです。あなたが誰かと話すとき、その話し方の一言一言にも影響していきます。

今、あかちゃんには、たくさんの力がつまっていると言いました。では、どのような力がつまっているのでしょうか。あかちゃんには、生き延びようとする生理的な力があります。脳が指令して、循環器系が機能して、生体を維持しようとする力です。もう一つ、あかちゃんには、人と繋がろうとする力があります。人と繋がろうとする力なのですけれども、生まれたばかりのあかちゃんは、それを、どんなふうにしてやっていると思いますか？ そう、泣くのです。

人間の赤ちゃんとは、ほかの動物のあかちゃんでは、何が違うかということ、人間のあかちゃんは、自立するのに長い時間がかかります。ほかの動物は、かなり早い時期に、自分で獲物を捜してきて自分で排泄して食べていく。ところが、人間のあかちゃんは、それをするまでに何年もかかるわけです。つまり、人間というのは、誰かにお世話してもらわないと、最初の何年間かは生きられない、生き延びられない特殊な動物です。人間は、いわば未熟児で生まれてきてしまうのです。未熟児で生まれてきたために最初の何年間かは、あかちゃんは誰かにしっかりだき抱えられ、その感触、その暖かみ、体内にいるときにやるべきだったことをしなければならぬ。よって、最初の何年間かは、全てあかちゃんを受け入れて、ただただ、胸にだき抱える、言葉をかける、身体的な接触快感を大人と子どもの間で持つということは、その後の発達にとって不可欠なのです。

誰かにお世話してもらわないと生き延びられない代わりに、人間のあかちゃん

んは、「お世話して」と発信する力をもって生まれてきます。それが人と繋がる力です。こういうわけで「私に気がついてちょうだい、お腹すいたんだから。うんちべちょべちょなんだから、気がついてよ」と言って泣くのです。それは、社会に向けて、外に向けて発信しているのです。この人と繋がる力のはあかちゃんの時のみならず、その後、人生を通して、私たち人間が生き延びていくために、たいへん重要な力です。人間はその力をもって生まれてきます。



このあかちゃんには、他にもいろいろな、他人とは異なる個性という力をもって生まれてきます。この個性があるゆえに、このあかちゃんと、もう一人のあかちゃんは違うユニークな存在なのです。人類の歴史の中で、二度と再びない存在です。かつてもなかったし、これからの人類の歴史の中にも、二度と再び生まれてこない、そういう存在とならしめているのが、その子のもっている様々な個性です。女の子だとか、男の子だとか、あるいは背がこの位だとか、顔がこういう顔だとか、誰と誰の間に生まれたとか、あるいは例えその子が重度な障害をもっているとしても。その障害も、その子を成り立たせている一つの個性であり、その子の力なのです。パワーなのです。こういうもの全て、人間が内にもってる個性力の源が、力となって発揮できるためには、条件が必要なのです。環境です。この人を、そのまま丸ごと受け入れてくれるという、そういう関係です。そういう周りの人です。

ですから、例えその子に重度な障害があったとしても、それを、丸ごと受け入れるという関係性があったときに、その重度の障害は、重荷では無くなり、個性という力になります。

だいぶ前にベストセラーになった『五体不満足』という本があったでしょう。乙武くんという、書いた当時はみなさんぐらいの学生さんでした。彼は、生ま

れながらにして両手両足がない。そういう重度な障害をもって生まれてきた人です。自分一人では動けないのです。しかし、その両手両足がないということも、乙武くんの一つの個性なのです。この本の何が感動を誘ったのかと言うと、他人は人生の重荷だろうとしか思わないその重度の障害を、彼は自分のパワーにして生きてきたのです。そのことが書いてあるのです。読んだ人はおそらく、それに感動するのだと思います。

ただし、彼にはそれを可能にする環境がありました。両手両足がないということも含めて、丸ごとこの人を受け入れてくれるという、そういう身近な人の存在です。両手両足がないことも彼の一つのすばらしさであると。つまり、この乙武くんという人が存在するということを受け止めてくれた親がいたということです。彼の親は、そういう関係性を、彼の周りにいる人たちにも要求していきました。学校の先生だとか、友だちに、「どうぞこの子をこのまま受け入れてください」と。乙武くんは、このように恵まれた環境に生まれ育った人です。ですから彼は、自分のそういう個性も大きな力にして生きてくることができたのです。

実は、私たち一人一人全てが、そういう可能体として生まれてくるのです。みんな、いろいろな個性という力を持って生まれてくる。ある人は、なんで女なんかに生まれちゃったんだ、うちの親は男が欲しかったと言い、そういう関係性しかもし持てないとしたら、その人の女であるという個性は、パワーにならないでしょう。重荷になってしまうのです。なんで自分は男なのに、こんなに背が低いのだろうか、嫌だなあと。男の背が低いということをいけないとかだめだとかということは、先ほどのジェンダーの社会の考え方です。それを自分のマイナスとってしまうのは、外からの抑圧がそうさせるわけです。男は背が高くて、体ががっちりしているほうが好ましいというようなメッセージが外からくるので、自分でもそう思わせられてしまうのです。人の背の高さや体つきというのは、その人にしかない個性の重要な一部であるにも関わらず、その個性を自分でおとしめてしまう、よってパワーにならず、重荷になってしまいます。そういうことを私たちは、それぞれ経験していくと思います。こういう外からの関わり方如何によって、私たちの中にあるいろいろな力が、すぐく傷つけられてしまったり、あるいは逆にそれが大きな力になったりということがあるわけです。

さっき言ったように、「なんでおまえはそんななの」とか、「なんであんたは男なの」とか、「どうして女に生まれなかったのよ」とか、「どうしてそんなに背が低いの」とかと言われたり、あるときは暴力を受けたり、虐待受けたりする、そういう外からのいろいろな傷つきが、私たちの中に起きてきます。みんな、外から傷つけられるのです。そうすると、どういうことがあるのかといったら、自分でもそれを、あっそうか、自分はだからだめなのだから、思ってしまう。これを内化と言うのですけれども、そうすると、ますます、自分の本来

もっている力を、小さくしてしまうのです。外からの抑圧は様々なかたちをとりますが、その最も身近な例は比較です。AちゃんとBちゃんが比較される。あなたとあなたの弟が比較される。そういう経験をすることによって、私たちは、自分はだめな人間なのかなあ、どうしてAちゃんみたいになれないのかなあと思うことで、自分の持っているもののすばらしさに気づけなくなってしまうのです。

心のレベルの人権

人が、本来生まれながらにしてもっている力というのを見てきたわけです。それは生理的な力であり、人と繋がろうとする力であり、いろいろな個性という力であり、もう一つ、とても重要な力があるのです。それは人権という力です。

日本人たちは、人権という言葉を知ると、とても堅い言葉と思い、まず法律を想像します。だから「あなたの人権は？」と聞くと、「いやー、どっかに書いてあったかな」、日本国憲法を開いて、見てみましょう。きっと書いてあるのではないの？ 私の人権？ 世界人権宣言というものがあるから、世界人権宣言を見たら私の人権も列挙してあるのではないか。これでは寂しいですよ。そこでみなさん、人権と書いてみてください。漢字で。どこでもいいですから、人権と漢字で書いてください。私もここで書いてみます。後ろのほうの方たち見えるかどうかかわからないのですが、人権と漢字で書いてください。

(各自、書いているようす)

書きました？ はい。そしたら、今度は、今もっているペンを反対の手にもちかえて、その反対の手で、その今書いた字のすぐそばに、また、人権と同じように書いてください。

(各自、書いているようす)

書きましたか？ 少しよく見てください。両方を見比べて。利き手で書いた人権と、利き手じゃないほうで書いた人権。どんなふうに違うのか、少し見比べてください。見比べたら、右でもいい左でもいいですから、お隣の人と少し見せあいっこしてください。「これ私の人権。こんなになりました」と。

(各自、見せあっているようす)

はい。見せあいっこしましたか？ 少し伺いたいです。

今ね、利き手で「人権」と書いて、利き手じゃないほうで書いて、自分でじっくりと見て、お隣の人のも見て。この間45秒。その間に思ったこと感じたこと気のついたこと、何でもいいです、何かありませんか？ 全く哲学的なこと聞いてないです。何かないですか？ はい。お願いします。なんですか？

(答えているようす)

はい。ほかには？

(手が上がったようす)

どうぞ。大きい声で言ってください。リピートしますから。

参加者：

「利き手のほうは自信があるように見えて、利き手じゃないほうは弱弱しく見えた。」

森田：

ほかには？ はい、お願いします。

参加者：

利き手でないほうが丁寧に一生懸命に書いている。

森田：

それは私も気づいたことです。みなさんを見ていて、利き手じゃない方はみんなすごく一生懸命字を書いておられました。だから、ずっと時間がかかりましたよ。そんなに一生懸命字を書いたことも久しぶりでしょ？ ほかにないですか？ あと一人ぐらい。

(手が上がったようす)

はい、お願いします。

(マイクを渡しているようす)

答え：

利き手じゃないほうで書いたほうが味がある。

森田：

ほう。そういうのが出てきました。利き手じゃないほうの字は上手ではないかもしれないけれど、それなりの味があるように思ったと。そう思った人、他にいますか？ ああ、そういう人も、少しいますよね。

今日うちに帰ったら、あるいは明日でもいいです、思い出したときに、その紙を、ぜひ、取り出してください。そして、利き手で書いた人権と、利き手じゃないほうで書いた人権をじっくり見て欲しいのです。利き手で書いた字のほうは、まあ、人に見せる字で、利き手じゃないほうは、あまり見せたくないかもしれないです。しかし、どちらもあなたが書いた字ですから、どちらも大切な自分が作り出したものという意味では、とても大切なものです。ですから、両方、すごく大事にしていって欲しいと思います。

人権というと、なんだか堅いこと、難しいこと、やっかいな話し、法律に関係あること、そういう思いがちです。そういう知識としての様々な人権については。みなさんいろいろなことを持っておられると思います。それは、今、その利き手で書いた人権。そのあなたの字に託すと思ってください。あなたの中にある、知識レベルでの人権ということです。そして今度は、もう一つの人権の考え方、それは、心で感じる人権。それを利き手じゃないほうで書いた、少しふにゃふにゃかもしれないが、けっこう味があるかなと思う、その字に託すんだというふうに、ぜひ、思ってください。

そう思って、残りの時間の私の話を聞いていただきたいのです。また思い出したときに、その紙を取り出して、二つの人権をじっくり眺めて欲しいのです。そのとき、何かいままでと違う考え方や思いを連想することが出てきたら、私は、今日みなさんと一緒にここで時間をすごすことができ、とても良かったと思います。

「21世紀は人権の世紀」とよくききますが、もしそれを言うのだとしたら、私たちは、その利き手で書いたその人権、知識としての人権あるいは法律としての人権をこの利き手にしっかり握りしめて、と同時に、今度は心のレベルの人権も利き手じゃないほうにしっかり握りしめて、両方を使いながら生きていく、それが21世紀は人権の世紀という意味ではないかなと思います。

心のレベルの人権ってどういうことだろう。いろいろな言葉を費やすよりも、とても簡単な理解のしかたがあるのです。それが手話なのです。日本語の手話で人権と言うのをどのように表すのか。手話を勉強している人はいませんか？ 誰もいないですか？ いない。はい。日本語の手話では、人権をどんなふうにするのか、今私がやってみますので、見ていてください。みなさんにもやってみてもらいますからね。

(手話で、人権とやっているようす)

簡単でしょ。胸の前で、人という、漢字を書いて、そして、これは筋肉もりもりポパイです。それをこう指さす。これが、日本語の手話の人権です。今度はみなさんと、行政の人権講演会行くと手話通訳の人が立ってるでしょ、行かないですかね。私はよくそういうところに話しに行くのですが、手話通訳の方がおられます。そうするとやっていますよ。見ててください。全員で少しやってみましょう。

(手話で、人権とやっているようす。) 胸の前で人という字を書いて、そして、こうやる。つまり、こういうふうに、なんか、いかにもプクっていか、筋肉もりもりっていうふうにくるむ。そうそうそう。

日本語の手話の人権です。実は私はこれを、数年前に、どこかの行政の人権講演会で、自分がしゃべっているときに見ていたら、そういうふうになっているのです。私はあまり手話のことを知らないのですが、とっても感動しました。というのは手話では、人権を、このように「人の力」と解釈しているのですね。私はずっと前から、人権とはそんな難しいことじゃなくて、「人の生きる力」を、やたら堅い言葉で言ってるだけだということを、言ったり書いたりして主張してきて、誰も賛同してくれないと寂しく思っていたのです。でもそんなことはない、手話の人たちもそう考えていたんだと。そしたら、なにか仲間がいるような気がして、たいへんに嬉しくなりました。

人権って、人の力、人の生きる力のことです。なんでそんなことが言えるのか、抽象的に言ってるんじゃないのです。文部科学省は、教育改革で生きる力を養おうと言っていました。でもその力の内容は何なのか、いまひとつ明らか

ではありません。生きる力を養うんだと標語を出してるのですが、じゃ、何が生きる力の内容なのかを見ていくと不明なのです。

では、人権という生きる力ってどういうことなんだろうってことです。なんで人権イコール生きる力なのかと。それを考えるには、人権とはなんぞやってこと改めて考えなきゃいけないです。すごくわかりやすい考え方は、人権という言葉と、権利という言葉、みなさん一緒に使ってると思います。あるときは権利だったり、あるときは人権だったり。でも厳密に言うと、これは少し違うのです。どう違うのかと言ったら、人権というのは権利の中の非常に特殊なものです。二つの意味で特殊なのです。

私はある大阪の小学5年生のクラスで「人権ってどういう意味？」って聞いたのです。そしたら、5年生の男の子でしたけど、手を上げて「それがないと生きるのに困るもの」って言いました。非常にすばらしい、人権の本質をついた解答です。人権と、もろもろの権利が違う第1点は、人権ってのは、それがないと生きられないというものです。みなさんは自動車運転する権利だとか、いろいろな権利もってるでしょ。持ってる人と持っていない人がいますが、私も自動車運転する権利を持っているのです。そう簡単には取られたくないです。でもこれは、人権じゃないです。

なぜならそれがなくても、私は生きられるのです。でも、人権は？ 例えば、人権の例と言ったら、誰でもが思いつくのが、最低限の衣食住でしょ。これは人権です。なかったら生きられないからです。最低限です、いっぱいじゃないです。これなかったら生きられないのです。だから人権なのです。

もう一つ。人権と権利が違うところ。人権は、全ての人が、等しい重さで持っているのです。ですから、この道の向こう側で、きのううまれたばかりのあかちゃんの人権のその重さと、国の大臣の人権の重さとは同じなのです。これが人権が権利と違うところです。権利というのは、全ての人が等しく持っていないのです。自動車運転する権利は、全員が持っていないでしょ。子どもなんか持ちたくって持てない。でも人権は、全ての人が、等しい重さで持ってる。この二つのことが、人権の本質です。それがないと生きられない。そして、全ての人が持ってる。それって、「人が生きる力」って言えるんじゃないの。

いろいろな力をもっているこの人が、生きる力という、この中心の力を傷つけられるとしたら、この人は、生きることが困難になるでしょ。この人の人権という、生きる力が傷つけられるってどういう行動ですか？ 例えば暴力でしょ。例えばいじめであり、例えばずっと続けられた嫌がらせであり、その他のいろいろなことです。そういったことを人は受けると、この生きる力という人権を深く傷つけられます。そういうのを法律のレベルでは人権侵害行為と言うわけです。

私が生きようとする、あなたが生きようとするために一番重要な、その力を深く傷つけられるということです。だから許せないのです。だから、もしそれ

に気がいたら拒否しなければならない。拒否できないんだったら、誰かの力を借りなきゃいけない。その力を借りるときに、知識としての人権、利き手のほうの人権はたいへん重要です。

エンパワメントという考え方ですけれども、これはどういう考え方かといったら、この人がいっぱい勉強して、いっぱい資格をとって、いっぱいもりもり訓練して、力をつけるっていうことではないのです。そうではなくて、この人の中には人権というすばらしい生きる力、人と繋がりたい力と生理的な力、そしてその人にしかない個性という力をいっぱい持っているのに、それを十分に発揮することを許さない社会があり、一人一人を大切に丸ごと受け入れない社会がある。そういう社会の中では、自分の持っている力を十分に意識することができない。自分は力がない存在だ、有名じゃないからだめなんだとか、どこどこ大学に入れなかったからだめなんだっていうメッセージを、どんどん外から受けるでしょ。でも、有名大学に行こうが、何をしようが、私にはこんなにすばらしい力が一杯ある。でも、その自分の力を自分で認めることを許さない社会があるとしたら、その社会は変えなきゃいけない。そういう社会を変えていくって、啓発をし、法律を変え、システムを変え、人々の意識を変えるということをしていかなきゃならないのです。

制度も変えなければならぬと同時に、外から「おまえはだめなやつだ、どうせだめなんだ」っていうこと言われ続けてきて、自分自身の中で、自分はだめだと自分の力を信じることができなくなっているとしたら、それも取り外していかないといけない。すると、一所懸命力をつけようとばかりしなくても、抑圧がなくなるので、自分自身が本来持っている力が、外に自然と出てくるのです。エンパワメントはそういう関わり方のことです。例えば、非常に打ちひしがれている、苦しんでる人に対して、頑張れ、頑張れって言うのは、何とかして力をつけてあげようという関わり方です。実はその人は頑張れって言われるほどに頑張れなくなります。そうではなくて、その人自身の中の力を自分で抑圧しているのを終わりにしなきゃいけないのです。

ですから、逆に、あなたの中にたくさん力があるでしょう、その力に気がついていきましょう、ということです。宅間被告も含めて、子どもの頃から人権を侵害され、自分の生きる力を粉砕された人たちが、結果的にどういうことをしていくのかといったら、他者の生きる力を奪おうとする行為に走ってしまう。そこに、ジェンダーバイアス社会は、大きな影響を与えていると思います。それを今私は、宅間のケースを通して、学びつつあるところです。私の個人通信「エンパワメントの窓」にこの「ジェンダーと暴力：宅間の場合」という論文を連載中です。

今日は、傾聴ありがとうございました。

司会：

大学の教師はまとめるのが好きですけれども、本日はやりませんので、みな

さんお考えいただき、感じたことを、また、反芻していただければと思います。
もう一度、森田さんに拍手をお願いいたします。
どうも、ありがとうございました。

講演内容に直接関係する著書

「エンパワメントと人権：心のちからのみなもとへ」（森田ゆり著 解放出版
1998年）

「子どもと暴力：子どもたちと語るために」（森田ゆり著 岩波書店 1999年）

「個人通信：エンパワメントの窓」（10号～13号 エンパワメント・センター
2003～04年）

<http://www4.osk.3web.ne.jp/~stmorita/>